大井九条の会

大井九条の会
事務局連絡先
83-2358　二上

10月7日の定例会では

8月会報で学習し、11月26日集いのチラシ配付、紙芝居「はだしのゲン」の内容につき、さらにその詳細を検討しました。

日本国憲法　第二章　戦争の放棄

第九条　日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

第二項　前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

次回定例会
・11月12日（日）14時～
・生涯学習センター第４会議室

「はだしのゲン・わたしの遺書」を読んで

漫画「はだしのゲン」文庫版全7巻を読んで、作者の中沢さんのことをもっと知りたくなり、読んだ。

この本で特筆したいのは、中沢さん自身がほぼ無傷で生存できたのも奇跡的だし、漫画「はだしのゲン」の誕生も奇跡的だということだ。原爆投下直前、小学一年の中沢さんは同級生のお母さんと校門の前で話をしていた。丁度その時に被爆した。同級生のお母さんは道の向こう側まで飛ばされ、黒焦げになり目をかっと見開いて即死、中沢さんはコンクリートの校門と倒れた木のおかげですき間ができ生存できた。爆発直後の爆心地近くの惨状を6歳の目に焼き付けた。

小学三年の時に手塚治虫の「宝島」を見て漫画家になることを決意し、1961年22歳の時に上京し、苦労の末漫画家として生活できるようになり、1966年、26歳で結婚もした。

その年の10月、母親の死が大きな転機となった。火葬で骨が殆ど残らなかったことに「原爆というやつは、大事な大事なおふくろの骨の髄まで奪っていきやがる」と憤りをつのらせ、漫画で原爆の悲惨さ、戦争の愚かさ、原爆投下、戦争遂行の責任がどこにあるかを告発しようと決意した。

「はだしのゲン」は1973年集英社の少年ジャンプで連載が始まった。また単行本発行は2年後だった。この経緯も奇跡的だと思う。当時の少年ジャンプの長野編集長が中沢さんの自伝漫画の下書きに「短い読み切りでは、言いたいことが表現しきれてないでしょう。これをもとにして長期の連載をやりませんか。好きなだけページ数も日数もあげます」と言ったのだ。当時少年ジャンプは大幅に部数を伸ばし週間漫画ではトップだった。長野編集長のこうした決断があったからこそ「はだしのゲン」は誕生できたと思う。

単行本発行は、集英社からの発行が断られ、一時は自費出版しようとまで思い詰めていた。そんな折、朝日新聞の平和問題担当の横田記者が訪ねてきて「はだしのゲン」を読み「ガラス片が体にいっぱいつきささるシーンなんていうのは、『はだしのゲン』を読んで初めてああいう状況だったのかとわかりました。インテリには、文学や絵画の方が高級で、どうしても漫画作品を下に見るところがあるけれど、この作品はすごい、本物です。文字よりも 原爆の実態が実にリアルに伝わります。『はだしのゲン』がこのままうもれてはいけない」と言ってくれた。これを契機に汐文社から単行本が発行され、予想に反し1980年には100万部に達した。

中沢さん自身は、6歳で被爆したことも特別なこととしてとらえている。6歳だったからこそ、おこったことをありのまま、フィルムのように脳裏に焼き付けることができた。6歳で被爆したことが「はだしのゲン」を産んだと言っている。

今、「はだしのゲン」は24カ国語に翻訳されたが、その殆どがボランティアでなされたという。それは世界の多くの人に内容が支持され、これは世界中に広めなければならない作品だと認められた結果ではないだろうか。

一見、奇跡的に見える「はだしのゲン」誕生から累計部数1000万部を超える現在までだが、それは中沢啓治さんの奇跡的な一生と「戦争や核はゆるさない」、「人間はみな同じ」という多くの人たちの思いが結実したものではないかと思える。

二上　洋